高齢者の職場探訪

北から、南から

第97回 岩手県

このコーナーでは、都道府県ごとに、当機構の65歳超雇用推進プランナー（以下「プランナー」）の協力を得て、高齢者雇用に理解のある経営者や人事・労務担当者、そして活き活きと働く高齢者本人の声を紹介します。

「働けるうちは、いつまでも」定年制度廃止が高めた働く意欲

企業プロフィール

有限会社ゴジュウゴ（岩手県盛岡市）

▶**創業**　1999（平成11）年

▶**業種**　高齢者向け介護福祉事業

▶**職員数**　83人（うち正規従業員数41人）

（60歳以上男女内訳）　男性（5人）、女性（20人）

（年齢内訳）			
	60～64歳	6人	（7.2%）
	65～69歳	10人	（12.0%）
	70～74歳	7人	（8.4%）
	75歳以上	2人	（2.4%）

▶**定年・継続雇用制度**

定年なし。平均年齢は50.3歳。最高年齢者はヘルパー職の78歳

本部が入居するビル

岩手県は、北は青森県、西は秋田県、南は宮城県と接しており、面積は東京、神奈川、埼玉、千葉の一都三県を合わせた面積より広く、本州最大となる広大で肥沃（ひよく）な県土を有しています。

秋田県との県境には日本最長の奥羽（おうう）山脈があり、これに平行して北上（きたかみ）高地が南北に広がっています。この間を北上川が流れ、流域には平野が形成された地形です。北上川沿いの平野部は、内陸性の気候のため夏は暑く、冬は寒さが厳しいのが特徴で、特に「氷上ワカサギ釣り」で有名な岩洞（がんどう）湖周辺に位置する薮川（やぶかわ）地域（盛岡市）は、氷点下30℃を記録することがある「本州一寒い場所」として知られています。一方、「三陸海岸」の名で知られる海岸沿いは、宮古市を境に、北側には断崖や海岸段丘、南にはリアス式海岸が広がり、まったく異なる景観を形成しています。

また、岩手県は歌人の石川啄木（たくぼく）、小説家の宮沢賢治、言語学者の金田一京助といった日本を代表する文学者を輩出している県です。

当機構の岩手支部高齢・障害者業務課の上村（かみむら）俊貴課長は同県の産業について、「伝統的に畜産業、農業、漁業が盛んです。第一次産業の就業者割合は10・6%※を大きく超え、国内有数の食料供給基地として日本の第一次産業をリードしています。とりわけ畜産業は、奥州（おうしゅう）市が誇るブランド和牛『前沢牛』、国内有数のブロイラー産地である二戸（にのへ）地域の養鶏、遠野（とおの）市名物のジンギスカン（羊肉）がよく知られています。三陸沖の魚介類も豊富で、世界三大漁場の一つに数えられています」と紹介してくれました。

一方、甚大な被害を受けた東日本大震災の復興事業は最終段階を迎えており、建設業界は震災需

※　2015（平成27）年国勢調査

要の反動減に備えた対応が急務となっています。

同支部には、長年の経験と深い見識があるプランナーが在籍し、企業診断システムなどの分析ツールを活用し、企業の実情にあった提案を行っています。また、就業意識向上研修や企画立案など企業が必要とするサービスを提供中です。

今回は、同支部で活躍するプランナー・千葉悦男さんの案内で、「有限会社ゴジュウゴ」を訪れました。

千葉悦男（えつお） プランナー（69歳）

アドバイザー・プランナー歴：26年

［千葉プランナーから］

「(1) 高齢者雇用対策は早め早めが肝心ですので、積極的な提案を行っています。(2) 高齢者対策に対する『やる気』の度合いが、企業の将来を分けるというほど重要だと考えています。(3) 企業の状況を見極めて助言を行っています」

高齢者雇用の相談・助言活動を行っています

◆同課の上村課長は、千葉プランナーについて、「率直で飾らず裏表のない人柄で、いつも泰然自若（たいぜんじじゃく）とした態度には、『この人に頼めば大丈夫』という安心感があります。『高年齢者雇用開発コンテストで大臣表彰をねらいます！』と宣言され、気力・体力の衰えを一切感じさせない姿は、まさに人生100年時代のお手本のような方です。カメラやクラシック音楽鑑賞をはじめ、趣味の範囲が広く、引き出しの多さに驚かされます」と話します。

◆当課はJR盛岡駅から徒歩15分。盛岡市の中心街・菜園（さいえん）地区の映画館通りに面するビル内にあります。ビルは赤い「Job Cafe」の看板が目印です。関係機関として「ジョブカフェいわてハローワーク盛岡菜園庁舎」が入居しています。

◆岩手支部には6人のプランナーが在籍し、県内の事業所訪問を通じて高齢者雇用にかかわる相談・助言を行っています。2019年度は制度改善の提案を107件、訪問を411件行いました。

◆企業診断システムを活用する場合は、分析結果を用いて、ていねいな相談・助言を行うことを心がけています。

◆相談・助言を無料で実施しています。お気軽にお問い合わせください。

●岩手支部高齢・障害者業務課

住所：岩手県盛岡市菜園1-12-18 盛岡菜園センタービル3階

電話：019（654）2081

家族が毎月決まって面談に訪れる介護施設

有限会社ゴジュウゴは、菊地孝治（こうじ）代表取締役社長が1999（平成11）年に設立。2003年より介護事業を開始しました。現在、盛岡市で3施設、釜石市で1施設の住宅型有料老人ホームを運営し、盛岡市内の施設ではデイサービス事業、訪問介護サービスも提供しています。

菊地孝治代表取締役社長（左）と水村眞紀子施設長

「ゴジュウゴ」という社名の由来は、菊地社長が55歳のときに立ち上げた会社だからだそう。遊び心がある菊地社長は、もともと盛岡市で広告代理店を営んでいましたが、福祉施設を開設することになったきっかけは、自身の母親を介護施設に預けていたころの忘れられない思い出にありました。

「当時は仕事に追われる毎日で、土曜に面会に行くと伝えたのに、結局、次の土曜、また次の土曜と延ばし延ばしになっていくのが常でした。ようやく面会に行っても『今度はいつ来るの』と、母に次を心待ちにされると、後ろめたさで胸が痛

みました」（菊地社長）

介護施設に親を預けると、家族は安心して訪問が少なくなることは珍しいことではないかもしれません。しかし、菊地社長は、そうした思いを抱いた経験から一念発起し、「家族が会いに来る施設」をつくろうと考え、毎月の利用料を家族に直接施設まで支払いに来てもらう仕組みの老人介護施設を立ち上げました。

直接の入金手続きは手間がかかるため振込みの方が何倍も効率的です。同社の水村眞紀子施設長は、この取組みについて、「毎月ご家族と会ってコミュニケーションがとれるので、双方の信頼関係の構築にもつながります」と説明します。

「働けるうちは、いつまでも」を唱えて定年制廃止

同社は2006年に定年を60歳から65歳に延長し、2016年には定年制度および継続雇用制度を廃止しました。このような先進的な定年制度の見直しは、菊地社長が日ごろから口にしている「働けるうちは、いつまでも」という口ぐせが体現されたものです。

「私自身、『働くことに喜びがある』と実感しているので、『働く喜び』を高年齢だからと奪うことがないよう、定年制を廃止しました」（菊地社長）。

千葉プランナーは、「定年廃止により、従業員は自分自身で決めた目標の年齢に向かって働くことができるようになります。定年がないからこそ、いつまでもがんばろうと思えるのではないでしょうか」と、定年廃止が高齢従業員のモチベーションを高めたと評価します。

また、「いつまでも楽しく働くこと」を念頭においた助言をしてきたという千葉プランナー。「『楽しく働く』には、年齢に関係なく従業員の自主性に委ねた職場づくりが重要で、少々の不都合があっても、従業員に任せて黙って見守ることが大切です」とくり返し伝えてきたそうです。

このアドバイスを参考にした取組みが、社内レクリエーションです。それまで会社が行っていたレクリエーションの企画や運営を従業員に任せ、予算は会社が出すように変更したところ（一部は従業員による会費）、従業員が自主的に集まって「親睦会」を結成。従業員同士の交流を深めるイベントを次々に企画し、一体感を高めていきました。

特に毎年、夏に行われる「盛岡・北上川ゴムボート川下り大会」への参加は事業所全体の一大イベントになっています。この大会は、8㎞下流のゴールを目ざしてゴムボートによる川下りのタイムを競うもので、同社のチームには還暦を超えた従業員も参加しました。

こうした取組みは、事業所全体の活性化につながりました。いまでは、レクリエーションにとどまらず、外部の研修に誘い合って参加したり、シフトを組む際に協力し合ったりと、仕事をフォローし合う助け合いの関係が自発的に生まれているそうです。

同社で働く高齢従業員の活躍ぶりについて、水村施設長は、「別業界の会社を65歳で定年退職して入職し、ヘルパーの仕事は初めてという方も多く在籍しています。こういう方々は視野が広いのか、仕事に臨む姿勢も柔軟で、ヘルパーの仕事の合間に修理や掃除など、いろいろな作業をしてくれます。高齢従業員のなかには、不得意な仕事がある人もいますが、ほかの従業員がフォローをするなど、お互いに助け合いながら仕事に取り組んでいます」と話します。

今回は、主に介護支援を行っているスタッフに話を聞きました。

利用者が話しやすく、若手の頼りになる存在

門間（もんま）久子（ひさこ）さん（65歳）は、60歳のときに看護師として入職し、デイサービスを担当して5年になります。看護師の資格のほかに、体操指導を行う「健康福祉運動指導者」の資格を放送大学で学んで取得し、心理学にも造詣（ぞうけい）があります。

25年間、宮城県内の病院に勤務していましたが、高齢の母親を介護するために定年の一年前に、故

郷の岩手県にUターンしました。

「デイサービスでは病院の看護業務のような医療の実践はありません。大事なことは利用者とのかかわり方だと感じていて、何でも話せるスタッフでいるように心がけています」（門間さん）

門間さんは、外部で行っている研修会にも積極的に参加していて、「よいことはマネしよう」と業務に活かしているそうです。

現場管理者として門間さんと一緒に働く佐藤朋子さん（42歳）は、「門間さんは利用者に安心感を与えてくれる存在です。若いスタッフには話しにくいことを聞いてくれ、その要望に対して的確に対応してくれます」と門間さんへの感謝を語ります。看護師としても、人生の先輩としても、たくさんの知識と知恵をもっている門間さんは、スタッフの相談相手にもなっているそうです。

利用者との良好な関係を築きコミュニケーションをとる門間久子さん

「門間さんをはじめ、60代のスタッフのみなさんは若々しくパワーがありますので、『高齢社員』と呼ぶのは抵抗があります。年齢は関係なく、同じ職場で働く仲間として頼りにしています」（佐藤さん）。

吉嶋登子さん（73歳）は、指定居宅介護、基準該当居宅介護の2級課程を修了しています。7年前にゴジュウゴに入職し、訪問介護の仕事を担当。これまで、保育士や看護補助をしてきたという福祉医療のベテランです。

介護の仕事を始めたのは自身の親の介護がきっかけだったそうです。「利用者の方が心を開いて話してくださるとうれしいです」と仕事のやりがいについて話す吉嶋さん。利用者の心に寄り添うことを大事に、日々の仕事にあたっています。

体を動かしながら働けることも介護職の魅力の一つだそうですが、最近は腰への負担を案じるようになってきたとか。ヘルパーの仕事は体が資本ということもあり、調子を整えるために、勤務時間を午前のみ、または午後のみの数時間におさえ、週5日の出勤を続けています。

「何歳まで仕事を続けることができるのか、挑戦しています。体力面での心配もありますが、心はまだまだ元気です。自問自答しながら、日々働いています。これからも笑顔で続けていきたいですね」（吉嶋さん）

豊富な経験を活かし、幅広い業務に精通する吉嶋登子さん

訪問介護サービスの責任者として吉嶋さんと一緒に働く赤坂悦子さん（60歳）は、「吉嶋さんは利用者との会話がとても上手です。利用者の話を上手に聞き、対応できる能力があります。それに、プライベートや仕事、施設の親睦会にも積極的で、何をしても楽しそうなんですよ」と話していました。

菊地社長は最後に、「これからも、年齢にかかわらず、活き活きと働いていけるような職場にしていきたいですね」と意気込みを語りました。

（取材・西村玲）